# こころの風景

≪1≫

真鍋　俊照

## 尺八の音色

### 静寂の中 仏と一体

久しぶりに自坊の静寂の中で、見事な尺八の音を聞いた。糸を引くような美しく澄んだ音色は、大師堂の屋根をこえて、その向こうの暗闇の中にそっと消えてゆく。

ふと空を見上げると、暮れかかったその闇を切り裂くように、淡い赤い雲が見える。大師堂の裏には、樅の大木があるが、その枝の間に赤い雲が重なって見え、なんともいえない不思議な光景を呈している。

尺八の奏者は新進気鋭の小濱明人師だ。彼は若干二十九歳。大阪で琴古流の尺八を学んだという。こうして四国霊場を一カ寺ずつ回り、尺八の演奏を奉納しているのだ。

私は、この悠久ともいうべき長い尺八の音を聞きながら、弘法大師の次のことばを思い出した。「五大に皆響あり、十界に言語を具す、六塵ことごとく文字なり、法身はこれ実相なり」（空海著『声字実相義』）。

「五大」とは、この世を構成している地・水・火・風・空のことで、これにはそれぞれ音響（音声）が宿っているという。音響とはつまり、われわれの身体から発せられる声のことである。音響は肉体から気をともなって声を発するのである。

そして「みな響きあり」と、宇宙のような広大な無限の境地で、声を発する前にバイブレーション（振動・動揺）を起こすのである。私はこのバイブズに導かれて、彼の尺八に聞き入ったのである。境内の風景すべてに生命が吹き込まれ、なんと美しい音だろう。

「十界」とは、地獄から仏界までこの世とあの世のつなぐ世界、これにはすべて「言語」をともなうという。私は尺八を聞きながら、ああ、これは人のことばであると同時に仏さんのことばなんだな、と感じたのである。いま私の目の前を尺八の音は、ゆっくりと仏さんの声に変わって、大師堂の屋根に沿うように登り、やがてその奥の大きな樅の木の根元に吸い込まれていく。

「六塵」とは、心をよごす六識の対象をいうのだから、色・声・香・味・触・法の六つである。これら六つ、すなわち人間の六根（器官）は、一息つけば一変して、ことばに変わってしまうことになる。

仏と人はいつもいっしょなのだ。ここでいう「法身」とは、大日如来という仏さんである。尺八の美しい音色を聞いて、これこそ大日さんのことばだと感ずることができた。どうやら、仏さんと私はすでに一体になったのだ。その目を開かせてくれたのが尺八である。「実相」とは、この仏さんと人とが一体となる流通径路のメカニズム（仕組み）をいう。

このメカニズムを知るためにこんな話がある。私は三年ほど前、音楽家の喜多郎さんと四十年ぶりに再会した。自坊に来られた彼は、門につるされた鐘をついて、その音をもとに八十八カ所の鎮魂の音楽を作曲するのだという。そこで、深夜に鐘の音を録音することになった。

この山寺でライトを煌煌と照らすものだから、近所の犬がたくさん集まってきた。鳴き声も半端ではない。そのにぎやかなこと。「うるさい」と私が大声でいうと余計、犬は喜んでほえる。しかし喜多郎さんが打ち木を持って、いざ構えると犬たちは一瞬、シーンと静まりかえった。

ゴーンと打ちならすと、なんと不思議、犬はそれを静かに聞き入っているではないか。さきほどの「実相」を考えると、この犬たちの呼吸と喜多郎さんの呼吸がピタリと合った一瞬の中に、答えがあるように思えてならない。

その後、喜多郎さんは、二十三番・薬王寺までの札所の鐘をつき終わり、「空海」という二枚組みのCDを完成した。その音の美しいこと、私は喜多郎さんの音曲の中に、尺八とはまたひと味違った静寂なる「こころの風景」を見た。

◇

四国霊場四番札所・大日寺（板野町）の住職で、四国大学文学部教授（美学・美術史）の真鍋俊照さんに日々の暮らしや信仰のなかで、感じたことや思索したことを、毎月一回寄稿してもらう。

まなべ・しゅんしょう　1939年東京生まれ。高野山大卒、東北大大学院修了。文学博士。専攻はマンダラを中心とした仏教美術研究。画家、東北大助手などを経て、96年から99年まで神奈川県立金沢文庫長。退職後は宝仙学園短大学長、コロンビア大客員教授などを歴任。著書に「空海のことばと芸術」（NHKライブラリー）、「密教マンダラと現代芸術」（法蔵館）、編著に「日本仏像事典」（吉川弘文館）など。板野町黒谷。

「地蔵菩薩」（画・筆者）